

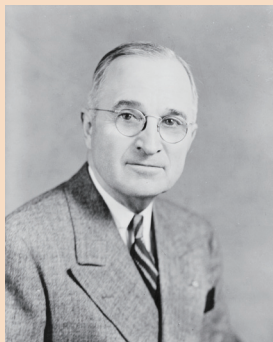
「イスラエル建国史」

36 独立闘争 2

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

白書を維持する労働党政権

機材の調達に目処をつけたベングリオンは、戦時中兵員輸送船として使用されていたクイーン・エリザベス号にニューヨークから乗船し、1945年7月26日ロンドンに戻った。帰航の途次船中で聞いたのが、イギリスの総選挙で労働党が勝利したニュースである。労働党はシオニズム運動を支持し1939年の白書に反対していたので、幸先がよいと思われた。しかし、アトリー労働党政権は、前の保守党政権と同じ路線をとった。そしてその急先鋒がベビン外相であった。



トルーマン大統領

アメリカの提案を拒否したイギリス

戦後ヨーロッパをさ迷うユダヤ人難民は、在欧連合軍最高司令部にとっても、頭痛の種であった。報告をうけていたアメリカのトルーマン大統領は、E・ハリソン国際難民委員会メンバーに事情調査を命じた。トルーマンは、副大統領時代からユダヤ人の窮状に同情していたのである。

ハリソン特使はヨーロッパのDP（離散民）キャンプを視察し、1945年8月24日付で報告書を提出した。それは、「ユダヤ人難民は、パレスチナへの即時避難を切望」しているとし、「10万人のパレスチナ移住が緊急事態を解決する唯一の方法」という内容であった。

トルーマン大統領は、この報告内容を受入れ、難民輸送用船舶の提供と必要経費の負担を約束し、イギリスのアトリー首相に難民のパレスチナ移住を要請した。しかしイギリスは拒否し、合

同調査委員会による大々的調査を提案した。

南に流れるユダヤ人難民

DP キャンプは、ドイツ、オーストリアに設けられたが、その後すぐイタリアにも設置され、収容人口は25万に達した。この人々に行き場はない。更に

大きい問題は、ポーランドから流出が始まったことである。ソ連圏で生残った人々が出身地に戻っても、そこは、敵意にみちた反ユダヤ社会であり、ユダヤ人を狙ったポグロムが頻発、戦後2年間で1,000人が殺された。1945年8月から1946年6月末まで

に4万8,000人が流出した。1946年7月4日、ワルシャワ南方のキェルツェで大規模ポグロムが発生、ユダヤ人42名が殺害され、多数の人が負傷した。そしてその7月から3ヶ月間で、実に9万から9万5,000人が流出した。ハンガリーとチェコスロバキアにも同じ動きがあり、この2地域から6万~6万5,000人が流出した。この流出民は奇妙にも南へ向かって動いていた。一部はブルゴス（ブルガリア）、大半はウィーン経由でイタリアへ流れた。彼等は希望の地エレッツ・イスラエルを目指していたのである。

ベリハ（脱出）の組織化

それはベリハ（脱出）として次第に組織化されていく。戦時中ナチと戦ったユダヤ人パルチザン隊、ユダヤ機関、ハガナがかかわり、支援した。

彼等が希望の地を目指そうとしても、英当局は、月間割当枠である1,500人

【これまでの流れ】

第二次世界大戦中、パレスチナのユダヤ人社会は英政府に協力したが、ナチスドイツの手を逃れてくるユダヤ難民のパレスチナへの受け入れを英政府が制限し、難民が路頭に迷う状況を見て、ユダヤ人社会はイギリスへの反発を強めていく。そのような中で、将来イスラエルの国防を担うようになるハガナや、反英武装闘争を繰り広げるようになるイルグンといった武装組織が形成されていった。

しか移住を認めず、それ以外は非合法移民として逮捕し、或いは船を出航地へ追い返した。

英当局からみれば、非合法移民にすぎない難民を、ハガナは総力をあげて救出した。ユダヤ機関と協力し、船舶の手当てや運航にかかわり、船がパレスチナに到着すると、英軍警の取締まりを妨害し、上陸者を直ちに現地住民と混ぜあわせ、区別をできなくした。戦後すぐハガナはイタリアに「非合法移民組織部（Mosad le-Aliya Bet）」をおき、ハガナのエフダ・アラジ（1907~1959）が組織したが、1946年からこの組織部をパリに移し、ハガナ創設者のひとりシャウル・アビグル（1899~1978）が指揮をとった。

非合法移民は、1945年には1,000名にとどまったが、1946年は2万2,365人に急増し、1947年には2万4,400人に達した。急増に伴ない英当局の取締まりも厳しくなった。

キプロス島へ移送される難民

1946年7月27日、ジョシュア・ウエツジウッド号（旧カナダ海軍の小型艦改造船）が、ハイファ沖で英海軍に^だは^は逮捕された。船には1,259名の難民が鈴なり状態で乗っていた。それから2週間後の8月11日、今度は小型船2隻（ヤゲール号、ヘンリエッタ・ショルド号）が、乗員1,300名諸共やはりハイファ沖で逮捕された。

この難民達は、キプロス島へ送られた。イギリスは、ここに収容所を設置し、1946年8月13日から運用を開始した。それと同時に海上警備を強化し、警戒線を突破しようとする難民船を片端から逮捕し、難民をキプロスに移送した。



エクソダス 1947 号

ユダヤ人社会の憤激— エクソダス 1947 号事件

なかには、キプロス島ではなく DP キャンプへ押し返したケースもある。フランスの港町セーテから出航したエクソダス 1947 号である。1,800 トンの船には、ドイツの DP キャンプを脱出した難民 4,553 人が乗っていた。ゼネストで道路封鎖中の仏交通組合は、難民輸送トラックの通行を許し、仏当局は難民の携帯する怪し気な旅券に目をつぶった。いずれも難民の窮状に同情してのことであった。1947 年 7 月 11 日に出港した船は、公海に出たところで待ち構えていた英海軍に誘導された。ハイファで英国船 3 隻に移された難民は、フランスへ戻されたが下船を拒否。3 隻はベビン英外相の強い意向で、ハンブルクへ回航され英官憲によって引きずりおろされた。約束の地を踏みながら船へ戻される難民の無念、2 ヶ月に及ぶ苦しい船中生活、いまわしい記憶しかないドイツの DF キャンプへ帰される悲劇は、逐一報道され、国際社会から同情の声がわきあがった。憤激するパレスチナのユダヤ人社会は、いよいよ反英闘争の意志を固めるのである。

1947 年 11 月初旬にブルガス（ブルガリア）から出航しようとした 2 隻（パン・ヨーク号、パン・クレセント号）には、実に 1 万 5,169 人が乗っていた。パレスチナ到達を阻止する英当局の強硬姿勢で、難民側はキプロス島直行に同意



ベビン英外相

し、12 月 31 日に同島に到着した。（キプロス島のキャンプには、1948 年 5 月のイスラエル独立時 3 万人を越えるユダヤ人難民が収容されていた。イスラエルの独立によって、拿捕される恐れはなくなったが、キャンプ開設からイスラエル独立までの 20 ヶ月余の間に 39 隻が拿捕され、合計 5 万 2,000 人がここに閉じこめられた。脱走した人もかなりいる。毎月英当局は、割当て枠の半分にあたる 750 人に、パレスチナ移住を許可した。1949 年 2 月初旬に最後の難民船が出航し、キャンプは 2 月 10 日に閉鎖された）



モシエ・スネー

ヘブライ抵抗運動の発足— 統一戦線時代

1945 年 10 月、三つの武装組織が統一戦線の形成協議を始めた。その結果生まれたのが、ヘブライ抵抗運動（HRM）である。三つの組織とは、ハガナ（3 万 6,000 人、内パルマツハ 2,000 人）、イルゲン（3,000 人弱）、そしてイルゲンから分離した過激派レヒ（数十人）

で、ハガナの民族司令部司令官モシエ・スネー（1909～1972）が、統括司令官となった。医師のスネーは、ポーランド軍の軍医であったが、第二次世界大戦時苦心の末パレスチナへ逃れ、ハガナに入隊した人物である。

統括司令部は、作戦の統一指揮を行わず、連絡、調整を主任務とした。ハガナとイルゲンは、共闘することもあったが、要人襲撃を行なうレヒとは一線を画した。その共闘例が、1945 年 10 月 31 日から 11 月 1 日にかけて実施された交通線破壊作戦である。二つの組織は、鉄道と橋梁 153 ヶ所を破壊し、この後も個々に道路や鉄道、送電線、燃料タンクなどインフラ破壊を継続し、英軍基地や警察施設を襲撃した。次はその襲撃例である。

- ・1946 年 2 月機動警察隊施設襲撃（ハガナ）、リッダ等 3 航空基地襲撃（イルゲン）
- ・同年 3 月 6 日サラファンド基地襲撃（イルゲン）
- ・同年 6 月 17 日周辺諸国と連結する鉄橋と陸橋 11 ヶ所のうち 10 ヶ所を破壊（ハガナ）

暗黒の安息日

1946 年 6 月 29 日、英当局はユダヤ人社会の指導部潰滅を目的に、ブロードサイドと称する作戦を実施し、ユダヤ機関執行部などの幹部 3,000 人を逮捕した。ユダヤ人社会は、これを暗黒の

安息日と称した。

この事件がきっかけとなり、抵抗運動 HRM は解散し、ハガナは難民救出、イルゲンは武力闘争を強めていく。そして、パレスチナの英当局は、軍隊と警察力合計 10 万を配備しても、状況悪化を防ぎきれなくなっていく。

【次号へつづく】

1937 年長崎県生まれ。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

